



Vol.14
September 2011

A r t & C u l t u r e



大学院デザイン研究科長

川口宗敏

Munetoshi Kawaguchi

マッキントッシュとライトに 思いを馳せて

周りを見渡せば、歴史・文化の重層性を感じさせるロンドンにいて、この原稿締め切りが近づく。近代の建築文化・芸術に思いを巡らせば、10年前に行ったグラスゴーのマッキントッシュと4年前に3度目の訪問をしたシカゴのライトが、即座に思い浮かぶ。マッキントッシュ (Charles Rennie Mackintosh, 1868~1928) の代表的な建築群、グラスゴー・スクール・オブ・アート、マッキントッシュ・ハウス、ヒル・ハウス、ウィロー・ティールーム、ハウス・フォー・アート・ラバーなどが、グラスゴーにはきら星の如く散在している。ライト (Frank Lloyd Wright, 1867~1959) の初期建築の代表作、ロビー邸、ユニティ・テンプル、ライト邸、ムーア邸、ヒュートレイ邸などは、素晴らしい建築群を擁するシカゴにあって、建築文化・芸術を語る上で不可欠な存在である。

この二人の建築家は、同時代に活躍したが、互いに交流があったわけではない。彼らは、共に多才である。建築、インテリア、家具、照明器具、ステンドグラス、什器までデザインしている。91歳まで長生きしたライトは、都市デザインまで手掛けている。職能が細分化した今日からすれば、彼らが残した素晴らしい業績は、後世のデザイナーが簡単には越え難いものである。

ところで、彼らの作品に魅了されるのは、作品の中に何となく日本的な雰囲気を感じ取ることができるからである。格子模様で代表される水平線と垂直線で構成される端正で簡潔なデザイン。効果的に導入された柔らかな曲線。3次元空間に展開された非シメトリの粋な構図など。彼らのデザインは、伝統的な日本美を形成する琳派や浮世絵の感性と共鳴している。彼らの生み出した日本的なものが、我々に親近感を持たせる。

ところで、彼らの生きた時代は、取り巻く社会全体が経済的に豊かな時代でもあった。当時、グラスゴーはスコットランド一の人口を擁した産業都市であった。シカゴも農産物の一大集

CONTENTS

巻頭寄稿	1
公開講座紹介	2~3
活動報告	4~6
インフォメーション	7~8

静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター

静岡県浜松市中区中央2丁目1-1 〒430-8533

●Tel:053-457-6113 ●Fax:053-457-6123 ●http://www.suac.ac.jp/

配地であり、交通の要所であり、アメリカ中部経済の中心地であった。優れた建築は、経済的余裕と文化・芸術に理解あるパトロンなくして存在しえない。近年、世界遺産となったアントニ・ガウディ (Antoni Gaudi, 1852~1926) 設計の建築群も、当時のバルセロナの経済力とパトロンであるグエル氏の支援なくしては在りえなかった。その時代の多くの富は、多くの職人のアナログ的な手仕事や高価な石材や木材などの材料収集にも充てられた。今日、我々が驚嘆する建物、道具、装飾品のディテールの数々は、熟練した職人技に裏打ちされている。もっとも、マッキントッシュもライトも若い時は製図工として働き、後年、芸術家というよりは、設計という職人技の頂点に立った人と言えなくもない。二人の描いたスケッチやパースは、美しく、感動的である。実際、晩年のマッキントッシュは、建築設計の仕事がなく、水彩画家になろうとした。

20世紀を代表する建築家ミース・ファンデル・ローエ (Mies van der Rohe, 1886~1969) は、「神は、ディテールに宿る」と言った。人間の持つアナログ的な技でしか、五感に耐えられるディテールはつくれない。魅了するディテールこそ、職人技の結晶である。石材の持つ冷たい重量感と精巧に彫られたレリーフ。木材の持つ柔らかな触感と精緻に組み合わせられた木組み。人間技とは思えない造形で構成された空間に包まれ、人々は神技としてのディテールに畏怖し尊敬する。

しかし、工期と職人単価が、経済的に最重要の指標となった現在、職人の世界であるアナログ的なものづくりは、残念ながら益々疲弊するばかりである。現在は、仮想のものが、多くの実体と置換し得ると疑わない世界に、我々は棲んでいるのだから。

しかし、今後は19世紀末期程と言わないまでも、アナログ的なものを復活させる必要がある。急速に進展するグローバル社会・情報社会に在ればこそ、デジタル技術によって生み出された富を、虚像ではなく実在するアナログ的なものの復権と創造に再投資すべき時代がきている。アナログ的なものとデジタル的なものが、共存、あるいは程良く棲み分けられた世界が希求されている。大型テレビに鮮明に映し出されたデジタル画像も素晴らしい。しかし、マッキントッシュのウィロー・ティールームの白い空間の中、美しく細工されたステンドグラスが嵌められた窓辺でコーヒーを飲む。ライトのヒュートレイ邸のステンドグラスが嵌められた天井の下、ソファに座り、緑色の広々とした前庭をぼんやりと眺める。こんな些細な日常こそ、最高の建築文化・芸術を堪能できたひと時だったと私は思う。今後は、五感に裏打ちされた体感できるアナログ的な世界こそ、その希少性によって、別次元の美しい感動の輝きを一層増すであろうと思う。

近世の宮廷文化

2011年度の前期公開講座は「フランス～豊饒なる六角形～」をテーマに6月18日から7月23日までの毎週土曜日、計6回の講座が開催された。その中から永井敦子准教授、岡田建志准教授の講義内容を紹介する。

フランスが服飾の点でも生活様式の点でも流行の発信地となった発端は、近世のヴェルサイユ宮廷にあると言われる。1682年からヴェルサイユに定着したフランス宮廷の流行は、ヨーロッパ各地の宮廷に模倣されただけでなく、フランス国内の地方貴族、パリの富裕層から地方都市の富裕層にまで模倣されるようになった。フランス史の通説では、1494年のイタリア戦争開始から1789年の革命までを近世と捉えるので、フランス宮廷がヴェルサイユにあった時代は、近世の後半にあたる。公開講座では、それ以前の、フランス宮廷がほかの宮廷を模倣していた時代から、革命直前の、宮廷がパリに追随するようになる時代までを取り上げたが、ここではヴェルサイユ以前の宮廷を中心に紹介する。

宮廷とは、国王の即位式や国政に関わる儀礼がおこなわれるだけでなく、君主が日常生活を営み、国政をとり、君主自身と宮廷を訪れる人々に娯楽を供した場でもある。ヨーロッパの宮廷文化はルネサンス期に、世俗の有力者による文芸の庇護が目立つようになると、まずイタリア諸国とブルゴーニュ公国で栄え、フランス王家はそれに追随した。

フランス王シャルル8世は、1494年からイタリア進出を図り、イタリアで獲得した美術品を収蔵するために、ロワール河畔のアンボワーズ城を整備した。フランソワ1世がイタリアから招いたレオナルド・ダ・ヴィンチは、この城に眠っている。アンリ2世の妃カトリーヌは、フィレンツェのメディチ家の出身で、香料や料理法などをフランスにもたらした。

当時16世紀のフランス宮廷は、イタリア趣味とそれへの反発で特徴づけられるが、また一方では「移動宮廷」という性格ももっていた。王宮としてパリ市内のルーヴルとテュイルリー、市外のフォンテーヌブロー、サン・ジェルマン・アン・レー、ロワール地方のプロワ、シャンボールといった数々の城が修築され、国王はさらに国内各地へも行幸した。頻繁な移動の背景には、国王の狩猟好み、宮廷への食糧供給の不安定さ、国王自らが国内各地の有力者と対話しなければならないという統治機構の脆弱さなどがあつた。

なかでもフランソワ1世は、上に挙げた城の多くを造営・増改築しながら居城を定めず、しばしば国内行幸や征戦もおこなった。カトリーヌ妃と息子のシャルル9世は、テュイルリー宮殿の造営に着手する一方、内乱が鎮静化したばかりの1564年から66年にかけて、2年2か月の間に200日以上を移動に費やし、距離4000キロメートルに及ぶ「大巡幸」をおこなっ

永井敦子(文化政策学部国際文化学科)

た。しかも国王の移動には、家族と愛人、重臣、護衛や書記などの実務者、下働きの従者、必要な品々を供給する商人・職人に至るまで、言わば宮廷が丸ごと随伴した。宮廷に伺候する貴族や外交官は、そこに入れ替わり立ち替わり加わったのである。

宮廷が移動を続けたのは統治機構の脆弱さ故だとしても、宮廷が拡大したのは王国機構が整備されつつあったためであろう。16世紀には中央にも地方にも国王官僚が増加した。多くの機関がパリまたは地方の主要都市におかれ、国王の周辺には各地と使者や書簡を交わすための人員が増えた。新たに官職を与えられた者のなかには、司法と財政の実務能力のある平民出身者が含まれた。その結果、中世以来の門閥を誇る貴族に対して新興の「法服貴族」が現れ、従来の身分秩序が損なわれた。

国王の行幸先となる地方都市においてさえ、中世から存続する市長と都市参事会員などと、設置されて間もない国王官僚との序列関係が、当人たちを含む都市の有力者の関心の的となった。その序列は都市の秩序の現出として、国王を迎える儀式のなかで披露されたのだが、国王との距離の近さが序列における上位を意味した。その儀式では国王の側も盛装して最高の威厳を示し、都市に庇護と秩序を与える者としての姿を見せなければならなかった。

同様に国王が国内の代表者を召集して開催する全国三部会は、王国全体の秩序を現出させる機会となった。宮廷もまた王国の秩序を形成する国政の場の一つに見立てられた。王宮にはそのような宮廷を収容し、そこで国王が人々に対して威厳を見せつけるための機能が求められた。

王国機構がいっそう整備されて統治が安定すると、国王の移動の範囲は狭まり、頻度も減少し、やがてルイ14世が宮廷を固定化すべく、1668年からヴェルサイユで大がかりな宮殿工事に着手した。この時期には多くの貴族が安定を得るため、国王の庇護を求めて宮廷に伺候するようになっていた。領地では自ら領主である貴族も、宮廷では作法に則った振る舞いをしなければならぬ。宮廷貴族にとって礼儀作法はむしろ、自らの地位を際立たせる手段となり、彼らのあいだで宮廷の作法はさらに洗練の度を高めていった。宮廷では常に新しい流行が生まれ、宮廷に近づこうとする人々の関心をひき続けた。

ルイ14世は、「臣下が君主に対して自由に容易にアクセスできる」とうたい、ヴェルサイユを公開としていた。しかし国王と宮廷を目にすることがなくても、国王と宮廷の動向に注意を払う人が増えた。だからこそ、ヴェルサイユが流行の中心となったのだろう。ルイ14世の死後、国王と王妃が王宮で威厳を示すよりも、心地良く生活することを求めるようになると、宮廷文化は新しい段階に入る。国王の威厳を今に伝える数々の王宮は、過酷な宮廷生活の場だったのだ。

公開講座紹介

ベトナムにおけるフランス文化の影響

岡田建志 (文化政策学部国際文化学科)

ベトナムは19世紀後半から20世紀半ばまでフランスに支配され、現在はフランス語圏の国々等による国際組織 L'Organisation internationale de la Francophonie の成員であるが、今日、公的にも私的にもフランス語が使用されることはほとんどない。しかし、ベトナムの文化を総体的に考察する上で、フランスとの関わりに触れずには論じられない。本講座では、現在のベトナムの人々の日常に深く関わる食文化・建築・言語の3点を取り上げた。

歴史的背景

16世紀以降、ヨーロッパ人によるキリスト教の布教活動が行われ、その過程でベトナムの人々がフランス出身者と接する機会が生まれた。1860年代にはベトナム南部（コーチシナ）が漸次フランスの植民地とされ、1880年代にはベトナム北部（トンキン）・中部（アンナン）もフランスに保護国化されて、当時のベトナムの王朝（グエン朝）の機構は温存されたものの、フランスが支配の実権を握った。

食文化

植民地時代に受けた影響が今日のベトナムの食文化に表れている例として、パンとコーヒーが挙げられる。

パンを意味するベトナム語として「バインミー」があり、これは通常はフランスパン風のパンを指す。他の様々な品と同様に街中でバインミーを売り歩く人がいたり、在来の麺類等と同じく手軽な食べ物として路傍の飲食店でバインミーが売られたりするのは、日常的な光景である。バインミーの食べ方として、野菜やパテ、ベトナム在来の肉製品等様々な具を用いたサンドイッチが一般的なものとなっている。

コーヒー（ベトナム語で「カーフェー」）も特に都市部では一般的なものとして普及している。一人用の金属製フィルターを直接カップに乗せて湯を注ぐのがベトナム式コーヒーの一般的な淹れ方である。ちなみに、ベトナム語で「カーフェー・スア」と言えば、文字どおりには「ミルク（入りの）コーヒー」だが、ベトナムでは一般には練乳を用いたものである。

ここに挙げたパンやコーヒーの食べ方・飲み方は、近年ではベトナム国外でも「ベトナム風」のものとして知られるようになってきている。

建築

今日のベトナムの都市には、植民地時代の西洋建築で今に残されているものがある。これらが全体としてフランスの植民地政策の下で建設されたものであることは銘記しなければならないが、現存するものをベトナムの人々が様々な形で活用し続けていることもまた事実である。ハノイにその例を見ると、ホテル・メトロポール（1901年）、オペラ座（1911年、現・ハノイ市劇場）のように現在でも当時とほぼ同様の機能を果たしているものもあれば、迎賓館に転用されたトンキン理事長官府（1919年）のようなものもある。また、ベトナム在来の要

素を取り入れた建築としてフランス極東学院博物館（1932年、現・歴史博物館）等の例もある（以上、括弧内の年号は建築年）。

在来の要素と西洋建築の要素が混淆した例としては、フエ郊外のカイディン帝陵も挙げられる。フランスの支配下に置かれた後のグエン朝諸帝の中にはフランスに抵抗する態度を示した人物もいたが、第12代カイディン帝（在位1916～25年）はその対極にあつたと評される。陵は帝の生前から建設が始められ、バロック様式にベトナム風の要素を取り入れた建築が今日に残されている。この陵は今ではフエにおける観光の対象の一つともなっている。

（増田彰久・大田省一『建築のハノイ』白揚社、2006年 参照）

言語

植民地化以前のベトナムでは、漢字とチューノム（漢字を基に生み出された文字）でベトナム語文を書き表していた。一方、キリスト教の布教活動においてローマ字によるベトナム語の表記法が工夫されていった。こうしたローマ字による表記法を整理し、1651年に『安南語=ポルトガル語=ラテン語辞書』（安南語=ベトナム語の意）を刊行したのが、アヴィニョン出身の宣教師アレクサンドル・ド・ロードである。こうして形成されたローマ字表記法をクオックグーと呼ぶ。植民地時代には、ベトナム語の表記法について、フランスがクオックグーへの転換を図っただけでなく、ベトナムの人々の民族運動でも知識の普及を目指してクオックグーの学習が推奨された。独立後はクオックグーが唯一の正式な表記法となり、漢字・チューノム文は廃れた。

語彙の面でのフランスの影響はどうだろうか。ヴオン・トアンによれば、ベトナム語の辞書に収められたフランス語由来の外来語は、『大南国音字彙』（1895-1896年刊）では3語、『ベトナム新辞典』（1952年刊）では225語、『ベトナム語辞典』（1988年刊）では1087語だという（Vuong Toàn, *Từ gốc Pháp trong tiếng Việt*, Nxb Khoa học xã hội, 1992.）。これは辞書に収められた語数であり、実際にベトナム語で用いられるフランス語由来の語は各時代ともそれぞれこの数字を上回っていると考えられる。試みに、1898年の『衛生宝鑑』（西洋の衛生学の知識を漢字・チューノムによるベトナム語文で記した書）を見ると、フランス語由来と考えられる語が15語ある。

また、近年の動向としては、1985～2000年に現れた新語約2500項目を収めた『ベトナム語新語辞典』（Viện Ngôn ngữ học, *Từ điển từ mới tiếng Việt*, Nxb Thành phố Hồ Chí Minh, 2002.）でフランス語由来の語が少なくとも36語確認できる。

人々が日常使用する言語としてフランス語が広く定着するということはなかったが、フランスとの関わりは今日のベトナムの人々の言語生活に上述のような影響を与えている。

イブニングレクチャー2011夏 インテリアデザイナー橋本夕紀夫さんを迎えて

中山 定雄 (デザイン学部空間造形学科)

昨年の冬に実験的に行ったイブニングレクチャーを、このたび文化・芸術研究センター長に特別研究として認めていただき、正式な第一回のイブニングレクチャーを大講義室にて行うことができました。

まずは私たちがこの企画で考えていることをお伝えいたします。歴史的にみても、産業や経済の分野から判断しても、浜松はデザインが大変盛んな街であるといえます。自動車やバイクの街、楽器の街、天竜杉などの素材にあふれ、マリンスポーツも盛んになっていい街のはずなのです。しかしながら全国を飛び回る活躍中のデザイナーや業界人、文化人は幾度となく浜松を通り過ぎ、かわいそうにもこの街の良さを味わうことなくどこかの仕事先へ到着、プロジェクトを瞬殺し、また移動。浜松はまたもや通過という日々を過ごしている訳です(かくいう私もSUACに赴任する前はそうでした)。多忙なスーパーデザイナー達に提案ですが、逆転の発想で浜松を起点としてもらえれば東京へも名古屋へも関西にも意識が近くなるのではないかと思います。小学生が工業の分野で太平洋ベルト地帯を習う時、東海道が日本のバイパスで輸送など様々な発信に有利であり、環境的にも発展に適していると教わりますが、デザインさらには経済の分野でも太平洋ベルト地帯で盛り上がりたかと思えたのです。講師の先生方のスケジュールを極力事前に打ち合わせさせていただき、イブニングレクチャーは7時限目です。その昼間仕事をした帰りの移動途中で浜松で降りていただくことを理想としています。それによって講師料も安く、夜ですので市民も集まりやすく、ディナーやお酒の話題にも発展しやすく、本音も出やすいのです。その結果、地域のデザイナーとのきっかけが生まれるかもしれませんし、何より学生への刺激がSUACの活性化につながっていくでしょう。

思い起こせば私の留学時代、ロンドンの小さな建築学校(AAスクール)でしたが、世界中の建築家、デザイナー、プロデューサー等がほぼ毎日イブニングレクチャーを行っていました。日本人も多く講演し、よく手伝わせられた事を思い出します。市民と学生が入り乱れ、終了後講師も加わり立ち話でエキサイトし大声が飛び交う活発なイベントでした。さすがヒースローはヨーロッパのハブだと感心しましたが、イブニングレクチャーのためにロンドン経由にしたスーパーマンも多かったと思います。その学校は歴史がありましたのでそこでイブニングレクチャーをすることにステータスを感じたり、喜びを感じたのです。学校にはイブニングレクチャーをやらせろというピンキリのデザイナーが殺到していました。私たちのこの企画はまだそこまで成熟はしていませんが、続けていくことで知名度を上げていきたいと思っています。そのためなるべく旬で話題のスーパーデザイナー等を頑張って連れてくることも重要なコンセプトなのです。また空間造形学科発というところもキャストイングなどでみなさんに興味を持っていただけたらと思っています。

記念すべき第一回のゲストは日本のインテリアデザイナーのトップランナーのひとりの橋本夕紀夫さんをお願いしました。彼は愛知県出身、スーパーポテト杉本貴志さんに師事を受けた後独立、現在橋本夕紀夫デザインスタジオの代表を務めています。ザ・ベニンシュラ東京ホテルや相田みつお美術館、数多くのショップ、レストランを手掛け、デザイナーズレストランという流行語をつくったヒットメーカーです。彼がデザインすると必ず流行ると噂され、デザイン業界だけでなくホテル業界でも注目を浴びる世界的なスーパーデザイナーです。

彼の空間に対する思考は、床や壁、天井をデザインするのではなく空間をデザインするというのだと思います。よって通常インテリアデザイナーは様々な拠り所からデザインを追求していくコンセプチャル派と直感から理由なく物事を決めていくイメージ派に分かれるのですが、彼はその中間的な珍しい感覚の持ち主と言えます。レクチャーでは新築のホテルなどのビッグプロジェクトから様々なジャンルの空間、家具、プロダクト、最後は和菓子まで200枚もの写真を見せて詳しく説明していただきました。その話の中で橋本さんの魅力がたくさん発見できたのでいくつか紹介します。

まず彼は作品を自分の作品と言わない、みんながつくったと言います。全ての写真でこのように説明していました。これは彼が日頃から材料や現場にたいへんな情熱を注ぎ、日本全国から匠を集結させ、職人たちに敬意を払っていることがよくわかる話です。感動しました。

施主とのやり取りのエピソードで感じたのは、難解なデザインの発言や先生という印象の押し付けをしないポリシーです。演じている訳でなく彼は自然と話す相手によって目の高さを変える反射神経があると思いました。しかも相手より少し低い位置に自分を設定します。つぶらな瞳でかっこいいと言ったり、子供のころの体験を説明に織り交ぜます。プロと話す時は多少謙遜気味に主張します。職人には敬語を使い依頼します。デザインの現場のレクチャーでしたが人としての道徳を学びました。

終盤の質問コーナーで、学生時代になぜインテリアデザイナーになろうと思ったのかという質問がありました。彼いわく全て出会いによって決まったと。愛知芸大時代、杉本貴志先生に指導されたことが大きかったらしいのです。またいろいろ先輩や当時の巨匠との出会いがあった。知らぬ間にインテリアデザインに引き寄せられたと説明していました。彼らしい優しい回答だったと思いました。人と人の付き合いの中で進んでいくプロジェクトの第一歩がすでに学生時代に在ったのです。

そのほかにも研究熱心であること、さまざまな事に興味を持つこと、デザインの物語性をロマンチックに表現することなどを学ぶことができました。

レクチャー終了後は学生とも長く交流をしていただき大変感謝しております。私たち教員とは橋本さんの作品からは恥ずかしいようなデザイナーでしたが、いろいろな会話ができて友好が深まりました。浜松を少し好きになっていただけたようで、このうえない喜びを感じました。この積み重ねで浜松発のデザインムーブメントを徐々に盛り上げていきたいと思っています。橋本さんには東京でこの企画やSUACの事を宣伝していただくようお願いしました。

次回もお楽しみにしてください。



活動報告

産学協同プロジェクトとAQUAWOOD展

河原林桂一郎 (副学長・デザイン学部生産造形学科)
越川慎也 (プロジェクトリーダー、大学院デザイン研究科2年)

産学協同プロジェクトの展開

デザイン学部では産学協同プロジェクトを教育、研究両面で推進している。AQUAWOODプロジェクトは、本学と豊橋市に本社がある朝日木材加工株式会社が産学協同で進めたものである。同社の開発した新素材を活用して学生が創造性あふれる用途開発と造形提案を行ない、同社がその事業化に向けて製品開発することを目的として2期にわたって推進された。プロジェクトの第1期の成果は、2011年3月に日本最大のインテリアデザイン総合展示会「JAPAN SHOP2011」(東京ビッグサイト)にて展示され好評を博した。第2期の成果は、同年7月9日から13日まで本学ギャラリーにて「AQUAWOOD展」として展示された。今回の「AQUAWOOD展」には、デザイン学部生産造形学科2年生13名と大学院デザイン研究科3名が制作した個人作品や「JAPAN SHOP2011」で展示された作品が並び、本学、産業界、地域関係者など延べ約300名の来場者があった。

新素材AQUAWOODへの挑戦

2010年12月に産学協同研究プロジェクトが発足以来、木材とアクリル樹脂を独自の接着技術により帯状に交互に重ねたAQUAWOODという新素材の用途開発に向けてグループを編成し、ディスカッションを重ねてきた。第1期ではデザイン作業をグループ単位で推進した。メンバー全員による100枚スケッチをベースにクリニックと称する中間チェックを朝日木材加工株式会社と数回実施し、試作3案を決定した。こうして選ばれた試作案を担当したグループの学生は、教員、技術指導員、大学院生の指導のもとで設計面、造形面はもとより加工方法、電装部品の仕様決定、組み立て等の検討を行った。学生は完成した試作3点とともに本年3月に開催された「JAPAN SHOP2011」に臨み、会場で建築家、インテリアデザイナー等のプロの声を直接聞く機会を得た。限られた期間内にグループ組織で効率的かつ完成度の高い試作を納期内で制作し、顧客の生の意見を聞くという経験は、学生にとっても初めてであり、その実践的教育効果は計り知れないものがあった。

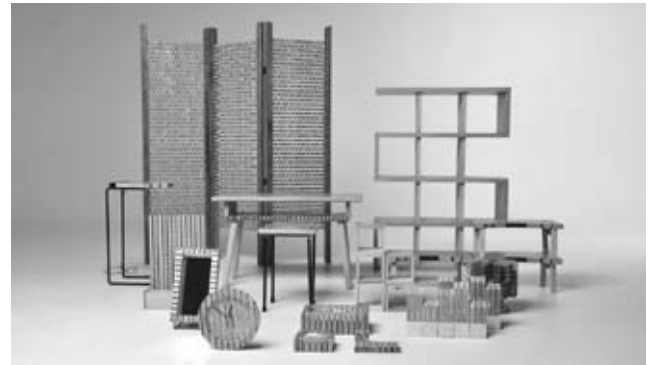
プロジェクトの第2期は、AQUAWOODの作品を学生が個人で制作するもので、各自がアイデアを実現するための構造、加工方法などについて教員、技術指導員、大学院生と検討を重ね、より質の高い成果物の創出に努めた。単なる用途開発ではなくAQUAWOODという素材を総合的に活かした加工方法などを合わせて開発した点が、このプロジェクトの最大の魅力であり、特徴であった。こうして完成した作品19点は、浜松地域のデザイナーや企業関係者も含めた多くの来場者の共感を得ることができた。

AQUAWOODの魅力を引き立たせる作品を制作する本プロジェクトは、アイデアをスケッチ化し、工房で試行錯誤しながら加工技術を確定した。学生が抱いた光と影や音のイメージを実現する照明や音響装置の材料や部品の調達、組み立て装着も学生が自ら行った。学生は、自分の造形イメージを実現することがいかに難しいかを体験的に学び、構造、強度、加工精度な

ど日頃はほとんど考えなかった問題に次々に直面し、解決を迫られた。強度や硬度の異なる木材とプラスチック(アクリル樹脂)の切削、接着、研磨加工では、作業手順も含め加工方法の工夫を迫られ、納期との関係でタイムリーに意思決定を下すという作業を次第にこなすようになった。単なる用途開発だけでなく加工方法の開発ができたのは、本学の充実した工房設備や装備と技術指導員制度などハードとソフト両面での整備された体制の賜物と確信している。

作品内容

本展示会には、棚やテーブルなどの大きなものからティッシュボックスやペン置きといった卓上小物まで幅広い作品が並んだ。来場者からは、現在は主として建材として使用されているAQUAWOODを学生の目線から家具や生活雑貨という身近な存在として提案した点に評価をいただいた。AQUAWOODのアクリル樹脂部分を光らせた作品も多く、アクリル樹脂と光の相性の良さに気付いた学生の作品が多かった。



展示作品の一部(衝立、棚、テーブル、椅子、時計、卓上小物など)

課題

通常の授業の枠外で学生が自主的に行う産学協同プロジェクトは、授業枠内で行う多くの他大学の推進方法と一線を画しており、通常の授業の独自性と独立性に貢献している。それだけに課題も多く、限られた期間内に学生が自主製作できる能力には、自ずと限界があるといえる。しかしながら、企業関係者やユーザーの生の声から得るところは多く、達成感も高い。今回のような企業からの材料提供、技術指導、展示会出展機会提供は、本学の教育研究体制や設備、装備と相まって大きな効果を出した。今後こうした活動をさらに面展開するに当たっては、カリキュラムとの関係も含め総合的な検討が必要と考える。地域への貢献を目指す本学としては、今後もこうした地域の産業と協同でデザインの力をビジネスにつなげる活動を発展させていくことが期待されており、教育研究活動の一環として活用していきたい。

最後に本プロジェクトの機会を提供された朝日木材加工株式会社と作品の製作支援を行った本学技術指導員各位にこの場を借りて御礼申し上げます。

静岡文化芸術大学の室内楽演奏会2011 進化する室内楽演奏会シリーズ

「静岡文化芸術大学の室内楽演奏会2011」は、三枝成彰文化・芸術研究センター長と小岩の指導のもと、本学学生・大学院生・社会人聴講生からなる27名（8月現在）のスタッフが企画・運営している催しで、文化政策、アーツ・マネジメント、音楽学の領域で教育・研究を進める本学の教育活動です。地域の特長、本学の特徴を活かす芸術事業の企画・運営に参画したいという学生を歓迎します。以下、本年度の活動について、学生スタッフの代表がレポートします。
小岩信治(文化政策学部芸術文化学科・演奏会シリーズ監修者)

今年で6年目となる本学の室内楽演奏会のスタッフの活動は、例年に比べて慌ただしくも挑戦的なものとなっています。これまでの「静岡文化芸術大学の室内楽演奏会」は、秋冬中心の年間3公演ほどでしたが、今年度は前期までにすでに4公演を終えています。また年間7公演のうち4公演は「はままつ文化サポート事業」として浜松市文化振興財団の支援を得ることができました。これは昨年秋から準備を進めてきた成果であり、早期開始と公演数の増加につながっています。

今年度の特色の一つは、開催場所が多様化したことです。4月と7月初旬の公演は、ともに中区蛸塚にある浜松市博物館と共催しました。この室内楽演奏会シリーズが、学内にとどまらず地域に開かれたものとして浜松市民に広く浸透していくために、普段演奏会では使われない場所を会場にしました。さまざまな空間での音楽の楽しみ方を体験できると思います。

4月16日の「上尾直毅のクラヴィコード演奏会」では、浜松市博物館の展示ホールが演奏空間に生まれ変わりました。一昨年フォルテピアノを演奏された上尾氏が、今回はクラヴィコードという古楽器を奏でてくださいました。小さな空間の中でそっと耳を澄ませて聴くクラヴィコードの音色は大きな窓から見える木々とマッチしていて、私たちスタッフもとても癒されました。客席との隔たりがなく、珍しい楽器に興味を示すお客様が多く見受けられました。

7月3日の「スピカ・クアルテット演奏会」は、前日のホテル・オークラ アクトシティ浜松でのロビーコンサートに続き、天竜区水窪の施設「カモシカと森の体験館」で開催しました。



サム・ヘイウッド
ピアノ・リサイタル 5/14

体験館は浜松駅発の送迎バスを約2時間半走らせた山奥にあり、改めて浜松の広大さに驚きました。スピカ（東京藝術大学学生による弦楽四重奏団）の皆さんはグリーンドレスが映える大自然をバックに、軽快にかつ心地良く演奏されました。館内の野生の剥製たちが今にも飛び立ちそうな、とて

も生き生きとした演奏でした。4人のアンサンブルは昨年の公演時よりレベルアップしていて、同じ学生として意欲が掻き立てられました。

11月に控えている『金原明善翁生家』で聴く～マンドリンと琵琶の奏で』は、東区安間町の明善翁生家の和室という、これまで演奏会場としては珍しい場所での開催です。室内楽は少人数の演奏スタイルのため、どこでも気軽に演奏できるのが強みです。今後も更に浜松市の未開の地を拓いていきたいと思いを。



アントレイ・バラノフ
ヴァイオリン・リサイタル 7/22

世界各地で活躍する海外アーティストの出演も相次いでいます。5月には大学講堂で、イギリスのサム・ヘイウッド氏に昨年に続いて演奏していただきました。プログラムの大幅な変更があり、お客様の反応が不安なまま本番を迎えましたが、その心配は無用でした。耳馴染みのある定番曲たちが上品に仕立てられ、最後は今年生誕200年を迎えたリストの《ピアノ・ソナタ》が見事に披露されました。ヘイウッド氏は公演前日には同講堂で音楽大学のピアノ専攻の学生などを対象に公開ピアノレッスンをしてくださいました。国際文化学科学生の通訳の協力を得て、プロのレッスンを目の前で見る貴重な機会を楽しめました。そしてヘイウッド氏のご提案から、私たちの新たな活動が始まりました。ヘイウッド氏はレッスン料と公演出演料を東日本大震災の災害支援に充てたいと希望されたのです。同じ頃、仙台で7月に予定されていた公演をやむなく中止したロシア人アントレイ・バラノフ氏のヴァイオリン・リサイタルの話も持ち上がっていました。そこで私たちは「SUAC for Japan“浜松から大船渡へ”音楽活動支援」実行委員会を立ち上げました。急遽7月22日に決まったチャリティーコンサート「A・バラノフ ヴァイオリン・リサイタル」を一から準備するのは通常公演以上に大変でしたが、とても良い経験になりました。数々の国際コンクールで好成績を残す彼の演奏は極上で、仙台で響くはずだった音色がこうして本学講堂で演奏されたことは感慨深く、講堂の歴史に残る公演になったことと思います。

後期には毎年恒例の「相曾賢一朗ヴァイオリン・リサイタル」にスコットランド人のピアニストのアリスター・ビートソン氏を招きます。またクリスマス・シーズンには近隣の東海調理製菓専門学校と提携して、季節のスイーツとともに楽しみいただくジャズ・コンサートをを行います。スタッフの人数も年々増えていき、後期からは新たな体制でスタートします。すでに進めている来年度の活動計画には、1年生も積極的に関わってとても頼もしいです。室内楽スタッフの活動と演奏会の進化にぜひご期待ください。

水村早紀（芸術文化学科3年、室内楽演奏会学生スタッフ）

インフォメーション

開幕！ 第6回静岡国際オペラコンクール

静岡国際オペラコンクール実行委員会事務局

世界中から集まった若手オペラ歌手がその実力を競い合う「第6回静岡国際オペラコンクール」(主催：静岡県、静岡県教育委員会、浜松市、本学他)が11月12日(土)から24日(木)まで、アクティシティ浜松大ホールをメイン会場にいよいよ開催されます。

本コンクールは静岡県ゆかりのオペラ歌手三浦環をたたえ、没後50年にあたる1996年から3年ごとに開催しています。

3月に発生した東日本大震災により、訪日外国人が大きく減少し、国内の多くのイベントが開催中止や延期を余儀なくされる中、本コンクールへの影響も懸念されましたが、世界15の国と地域から177名の応募があり、予定通り開催の運びとなりました。

予備審査(6月7～9日、本学)を経て参加が認められた出場者は、第1次予選で自らが得意とするアリアを2曲歌います。バロックから近・現代に至る名アリアの数々を一度に鑑賞することができるため、オペラファンの方にも、またオペラが初めての方にも十分に楽しんでいただけます。

続く第2次予選では、出場者がオペラの一役を選び、審査委員から指定された箇所を歌い演じます。これは世界の声楽コン

クールの中でも数少ない審査方法で、出場者の発声技術や表現力はもとより、オペラ歌手としての経験も同時に問われる難度の高い課題となっています。オペラの1シーンを堪能されたい方にお勧めします。

そして、2つの予選を勝ち残ったファイナリストが、オーケストラ・ピットに配した現田茂夫氏率いる神奈川フィルハーモニー管弦楽団の演奏で、本選の最終審査を受けます。舞台には出場者のみが登場し、本物のオペラの上演形態に近づいた、緊張感みなぎる演奏が繰り広げられます。

前回コンクールは、本コンクール史上初めて日本人が第1位の栄冠に輝くという記念すべき結果となりました。受賞した光岡暁恵さんは、入賞後、藤原歌劇団公演『ルチア』で主演するなど、現在、最も注目されている新進ソプラノとしてますます活躍が期待されています。今回の出場者の中からも、本コンクールを機に、静岡から世界へと羽ばたく新たな逸材が生まれることでしょう。

未曾有の災禍に見舞われたこのような困難な時にこそ、次代を担う彼らの歌声が、夢や希望のある明日への活力になることを確信しています。

コンクール区分	席種			価格	チケットぴあ Pコード	
第1次予選 11/12(土)～ 11/14(月)	一般	自由	1階	¥500	135-851	
	学生	自由	1階	無料 (大学生以下)		
アクティシティ浜松大ホール 開場13:00 開演13:30						
第2次予選 11/16(水)～ 11/17(木)	一般	自由	1階	¥1,000		
	学生	自由	1階	無料 (大学生以下)		
アクティシティ浜松大ホール 開場13:00 開演13:30						
本選 11/20(日)	一般	指定	1階	¥3,000		
	一般	自由	3・4階	¥1,500		
	学生	自由	3・4階	¥500		
アクティシティ浜松大ホール 開場12:45 開演13:30						
通しパス券 (公式プログラム付) 11/12(土)～ 11/20(日)	一般	予選自由	1階	¥5,000		782-951
		本選指定				
入賞者記念コンサート 静岡公演 11/22(火)	一般	自由	1・2階	¥1,500	135-871	
	学生	自由	1・2階	¥500		
静岡音楽館A O I 開場18:30 開演19:00						
入賞者記念コンサート 東京公演 11/24(木)	一般	自由	1・2階	¥2,000		
	学生	自由	1・2階	¥1,000		
紀尾井ホール 開場18:30 開演19:00						

チケット案内(発売中)



第5回本選 第1位の光岡暁恵さん 本学卒業生 三浦佑介さん制作



伊藤京子審査委員長らによる予備審査

○後期公開講座「文化とデザインの時代Ⅲ」

9月24日(土)	バリアフリー、ユニバーサルデザイン、そしてインクルーシブデザイン	古瀬 敏 (空間造形学科)
10月 8日(土)	感性マーケティングと色彩戦略	宮内 博実 (メディア造形学科)
10月15日(土)	「創造都市・浜松」の実現に向けての課題	片山 泰輔 (芸術文化学科)
10月22日(土)	自動車の歴史とデザイン文化の変遷	吉村 等 (生産造形学科)
10月29日(土)	これからの中小企業経営～フランチャイズ・ビジネスに学ぶ～	小本 恵照 (文化政策学科)

時間：13：30～15：30
会場：南棟3階 377中講義室
対象：高校生以上
受講料：一般・大学生3,000円／全5回 (1,000円／1回) 高校生・本学学生：無料

○特別公開講座「薪能」

10月 5日(水)	第一夜 能講座 講師 山本幸司 (副学長)、梅若猶彦 (芸術文化学科)	18：30開演
10月 6日(木)	第二夜 薪能 能「正尊」、狂言「清水」	18：00開演

受講料 2日間通し 3,000円 (通し券のみ)

○吉田喜重・岡田茉莉子講演会

10月28日(金)	第一部 (13：00～) 映画上映「鏡の女たち」(吉田喜重監督、岡田茉莉子主演、2002年)	
	第二部 (15：30～) 講演会 吉田喜重(映画監督) 岡田茉莉子(女優) マルコ・マッツィ	
	進行：木下千花(芸術文化学科)	
	会場：静岡文化芸術大学講堂 入場無料(申込不要)	
	※講演会記念ポスター展同時開催 10月20日(木)～11月1日(火) 会場 静岡文化芸術大学ギャラリー	

○静岡文化芸術大学の室内楽演奏会2011

- 「金原明善翁生家」で聴く～マンドリンと琵琶の奏で～
日時 11月6日(日) 13：00開場 13：30開演 会場 金原明善翁生家(浜松市東区安間町)
柴田高明(マンドリン) 清川嵐舟(琵琶) 入場無料(整理券が必要です)
- 相曾賢一朗ヴァイオリン・リサイタル
日時 11月27日(日) 14：00開場 14：30開演 会場 静岡文化芸術大学講堂
相曾賢一朗(ヴァイオリン) アリスター・ビートソン(ピアノ) 入場料 一般3,000円 学生2,000円 中学生以下無料
- スイーツ・コンサート
日時 12月7日(水) 17：50開場 18：15開演 会場 静岡文化芸術大学ギャラリー
波多江史朗(サクソフォン) 羽石道代(ピアノ) 入場料 一般2,000円 学生1,500円 中学生以下無料
(公演後会場隣接スペースにて東海調理製菓専門学校協力による「スイーツ・タイム」)

○スポーツ文化シンポジウム「日仏におけるスポーツ文化の社会的価値」

玉木正之(スポーツライター、本学特別客員教授) 溝口紀子(国際文化学科) ほか
日時 11月18日(金) 14：40～17：50 会場 南棟176大講義室

○ナターレ2011 声楽の夕べ

セルジョ・ペトルツェッラ(テノール) 藤井泰子(ソプラノ) 日時 12月22日(木) 18：00開場 18：30開演
会場 静岡文化芸術大学講堂 入場無料(申込不要)

○ユニバーサルデザイン絵本コンクール募集

募集内容：ユニバーサルデザイン絵本
募集期間：2011年10月1日(土)～2012年1月10日(火)まで(当日消印有効)
応募資格：子ども部門(中学生以下)、高校生部門、大学生部門
結果発表：2012年1月23日(月) ホームページで公開し、あわせて受賞者にはメールなどで通知します。
展示会：2012年2月11日(土)～2月19日(日)(静岡文化芸術大学)
応募先/問い合わせ先
〒430-8533 静岡県浜松市中区中央2-1-1 静岡文化芸術大学絵本コンクール事務局
TEL 053-457-6178 e-mail：ehon@suac.ac.jp (林左和子研究室)

編集後記

前号Vol.13の校正がほぼ終了し、編集後記を書いていたのは3月11日午前のこと、当日午後には未曾有の大震災が発生、以来半年、救助、避難、救援、そして復旧、復興、原発事故収束に向け、実に多くの人たちによる懸命の努力と様々な支援が重ねられています。今、復興のための予算やその財源などが論議されていますが、設備、モノ、システム、仕組みなど日々の生活や生産活動に関わるあらゆるものの復活に真の生気を吹き込むのは、私たちの社会の中で蓄積されてきた「文化の力」なのでしょう。文化を産み出し、蓄積する小さな営みによって、少しずつながら新たな日常が創造されていくことを実感する毎日です。(St.)

Art & Culture

文化・芸術研究センター
Vol.14
ニュースレター

September, 2011

発行人：三枝成彰 編集人：富田晋司
発行：静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
(事務局 静岡文化芸術大学 企画室)

